

## 『若草物語』における「自然」の表象についての一考察

秋田 淳子

Roberts Brothers 社の編集者 Thomas Niles から少女向きの作品執筆依頼を受けて Louisa May Alcott が執筆した *Little Women* は、1868 年に出版されるやいなや大成功を収める。多くの読者の要望を受け、1869 年に *Little Women* の Part Second、1871 年に第二部 *Little Women*、1886 年に第三部 *Jo's Boys* が発表される。日本で『若草物語』という名称で定着している作品は、4 作品のうちの第一作品だけを指す場合もあるが、March 家の年代記として三部作を相対的に『若草物語』として扱う場合もある。本論では、マーチ家をおもな作品舞台とする第一部、次女の Jo が Aunt March から継いだ Plumfield の地所に、夫 Bhaer とともに開いた学校が背景となる第二部と第三部を総称して『若草物語』と呼び、その「自然」<sup>1</sup>の表象を考察したい。

約 20 年の歳月をかけて発表された『若草物語』三部作においては、自然に関する表象の意味も変化をとげる。しかし、作品世界には共通して、「自然」が多く描出される。作品に登場する自然界の構成物は、第一に天気、気候、四季などの天空に関する事象、第二に大地、海洋、山、川、森、池、石などの無生物、第三に動植物などの人間以外の生物がある。「花が咲いたように」や「雲が晴れたように」などの心理描写、また、状況展開を示したり、人間の成長やそれを助ける教育を、作物を栽培するメタファーによって表わすことも多い。

1970 年代以降のフェミニスト研究家によるオルcott の再評価は、

1 「自然」という言葉の定義は論点によって広範にわたるものである。生態系を構成する一員として人間も自然の一部であるという考えに立つことももちろん必要な視点である。本論のように「自然」と「人間」、あるいは、「自然環境」と「人間の生活圏」と二分して境界線をもうけた考察をすること自体、環境倫理的な視点に立つならば、自然環境と人間の調和のとり得る有機体としての自然観を否定するものとなろう。しかし、作品出版当時のアメリカ社会における人間中心主義的な自然観を明らかにするために、本論では人間と自然と区分をして論じることとする。

『若草物語』を児童書、センチメンタルな内容を扱う家庭小説というジャンルに限定された作品ではないことを立証してきた。<sup>2</sup> A. M. Bernard などの偽名を用いて発表された小説研究もすすみ、1993年に新たに発見された原稿の出版をもってオルcottの再評価は目ざましい発展を遂げた。また、現在では、19世紀半ばにアメリカ社会で生じていた社会改革運動との関わりにおける研究も進んでいる。しかし、たとえば、彼女の改革を論じる Madeleine B. Stern の *Louisa May Alcott: Signature of Reform* や Sarah Elbert の *Louisa May Alcott: On Race, Sex, and Slavery* も、当時の主要な社会改革運動への言及をオルcottの言説から抜き出して紹介するものの、自然や環境への意識という点については先行研究がない。<sup>3</sup>

超絶主義思想をもち、教育家、哲学者の父親 Bronson Alcott の Ralph Waldo Emerson や Henry David Thoreau ら超絶主義者との親交をとおり、オルcottも幼少期から彼らと交流を持っていた。超絶主義の思想にふれるばかりか、ソローの案内で Walden Pond で遊び、Concord の自然を体験している。また、こうした自伝的な背景を登場人物に投影し、コンコードでの生活を色濃く映した背景をもつ『若草物語』の作品が、当然描写されているはずの「自然」との関係性において論じられてこなかったのはきわめて不思議なことである。実験共同体 Fruitland における失敗などの体験を経たオルcottが、抽象的で理念化されがちな超絶主義の自然観にたいして、複雑な心境を抱くことになったとは想像に難くない。しかし、彼女は自然という主題から目を逸らせることはな

2 たとえば、*Little Women and the Feminist Imagination: Criticism, Controversy, Personal Essays* の序には、『若草物語』について初めて執筆された1928年の論文から、現在に至るまでの先行研究の軌跡が記されている。

3 *A Hunger for Home* の序には、“... [Thomas] Beer, like many succeeding critics, saw Alcott's domestic realism as a challenge to the natural world presented in *Huckleberry Finn*.” (46) とあり、多くの批評家が、オルcottの小説世界と自然界との間に距離があるものとみなしていると指摘する。また、Ann Douglas の序は、“She rejected what she felt as Transcendentalism's impersonalism, its abstraction, but she used her fiction to question and redefine Transcendental ideas and beliefs.” (46) と超絶主義について言及する。しかし、オルcottの自然との関わりに、それ以上言及することはない。

く、『若草物語』において自然の力を主張の核とした。

『若草物語』は、南北戦争後の再建期に都市化が進んだアメリカ社会を背景とし、当時の自然観を映している。同時期のアメリカ社会は、急速にすすむ産業や科学を発展させたばかりか、人間が自然に及ぼす管理の範囲を拡張していく時期でもあった。作品世界にも、人間の手による「管理される自然」と、手が加わることなくありのままに自律して存在する「管理されない自然」という2種類の自然が共存する。本論では、両者の自然の表象を分析することをとおし、『若草物語』の自然の主題が意味することを考察したい。また、その作業をとおして、「自然」という主題が、すでに再評価が定着した『若草物語』研究において不在となってきた意味も探ることとなろう。

## 1. ユートピア世界を管理するシステム

無名時代のオルcottは、センセーショナルな作品群で発揮していたそれまでの筆致や趣向を、出版社の意向に沿わせることを課せられる。さらに、第一部の成功は、第二部、第三部の執筆に際して、道徳的な教訓をもつ少女のための作品を求める読者の期待をも彼女に負わすことになった。こうした理由により、『若草物語』は、年輩の者たちが子供たちや生徒たちを無償の愛で包む家庭と学校において、登場人物たちが道徳性を高め、善良であるために奮闘するという「児童向け」の体裁をとった作品となっている。

『若草物語』の第一部の舞台となるマーチ家、そして、第二部と第三部のプラムフィールドは、物理的に厳しい現実を孕む外部から遮断されていることが強調される。第一部のマーチ家とLaurieの住む隣家Laurence邸は、姉妹たちが働きに行ったり、買い物をする町からも隔離されている。父親が赴いている戦地どころか、姉妹が援助をする貧困に苦しむ家庭や、四女のAmyが罰せられたために退学した学校などがある近隣の町からも距離を置いたところにマーチ家はある。彼らの生活圏は、遠方で生じている戦争が象徴する、予想できない状況からは安全

で保護されたユートピアのような領域である。四姉妹は、父親が不在の間は母親、聖書、そして John Bunyan の *Pilgrim's Progress* の教えをととして忍耐や自己鍛錬を経ながら成長していく。四姉妹やローリーは各々の内的な弱さを認識し、それを受容しながら自己管理の訓練をする。内面を管理するばかりではなく、家庭を中心とする領域が平和で快適であるためには、各々が家庭内の勤めを果たさなければならないことも学ぶ。また、結婚した長女 Meg が料理のレシピブックを参照して家事を営むように、家庭にもアドバイスブックをととした管理システムが導入されている。登場人物たちは自己や家庭を「システム」に基づき管理をし、善良な人間になり、快適な空間を維持しようと努めている。

『若草物語』において登場人物たちが管理しようとするのは、内面世界や家庭だけではない。第一部から三部へと流れる 20 年間の歳月におけるアメリカ社会は、管理システムを自然環境にも向けようとした時期であった。野性の自然がアメリカの広大な国土を占めていた時代は終わり、たとえば、1846 年には the Smithsonian Institution、1869 年には New York の the Natural History of Museum、1872 年にはアメリカ初の国立公園 (the Yellowstone National Park) が創設されていくなど、人間は自然の中のひとつの構成物という立場ではなく、自らのシステムを設定して、それらを管理し、自分たちの利便性に適合させようとする立場を適用していく時期であった。この時代は、自然の他者化や客体化をすすめ、人間とそれとの間に距離を生じさせてもいた。第三部において周囲に石炭工場ができたことで、ローレンス邸や「鳩の家」がブラムフィールドの敷地に移動してくるなどの影響を受けるように、地方と都会の二極分離も進むなかで、失われていく野生の環境を管理し、保護する必要性も生じていた。

『若草物語』の登場人物たちは、自然界を様々なシステムによって管理し、調和のとれた生活圏において自然界を利用している。第一部のユートピア的な領域においては、姉妹たちは自分たち自身が管理し得る範囲で自然との関係を築いている。猫や小鳥を飼い、畑に好きな花や作物

を自由に植える。りんごの木の上で読書をしたり、その枝を馬にみたてて乗馬の練習をし、川でボートやスケートをしたり、川辺でピクニックをしたりと、子供らしく自然の中で遊ぶことが多い。たとえば、春の雨の日には屋内で家庭演劇や家庭新聞の作成などの楽しみに興じているが、それ以外の日には、姉妹たちが “Gardening, walks, rows on the river, and flower-hunts”<sup>4</sup> を楽しみ、自然と親しんだ日常生活を営んでいることが紹介される。

プラムフィールドの学校は、マーチ叔母さんが残した広大な敷地内に建てられている。大きな門をもつ塀や柵によって外部の世界からは隔離された領域は、小川、丘、池、森などの豊かな自然環境が残されている。外部の世界から入学する、貧困から犯罪に手を染めたような少年や身寄りのない不遇な境遇の子供たちが他の領域の存在の影を落とすものの、そこにはマーチ家の家庭のように、平穏で愛情が満ち溢れた学校が運営されている。少年たちは成長過程にあり、嘘や窃盗という事件も発生する。しかし、プラムフィールドの学校のシステムが反省を促し、善良な人間へと彼らを導いていく。

学校は教室内だけの学習に重点を置くのではなく、生態系に根ざした自然環境における活動も重視している。たとえば、小さな少年たちはベア先生と一緒に散歩に出かけることが毎週の習慣となっている。“[F]or all the active young bodies must have exercise, and in these walks the active young minds were taught to see and love the providence of God in the beautiful miracles which Nature was working before their eyes.” (548) と書かれるように、幼少期から自然に直接触れる経験をとおして畏怖や敬慕の念を抱くための教育プログラムが組まれているためである。また、少年たちは自給自足の生活を送っているわけではないが、自然のサイクルに従って管理システムを学びながら畑を耕し、収穫物を得る。また、好きな動物を所有し、世話をする

4 *Little Women, Little Men, Jo's Boys* (NY: The Library of America, 2005), p. 111. 以下、本文中の言及はすべてこの版により、頁数は引用末括弧内に記す。

ことも可能である。教室での学習だけでなく戸外で活動して身体を鍛錬したり、科学や博物誌などの教育目的のために、自然界との接触の機会が設けられている。彼らは生態系のサイクルに従った自然環境のことをよく知り、それと調和することを学ぶ。

ブロンソンが Temple School において失敗した教育理念を映したプラムフィールドは、当時のアメリカ社会に珍しかった教育システムを導入しており、そこでは子供たちの自主性が尊重されている。そのため、厳重な管理のシステムというものはほとんどない。数少ないルールの中なかでも、自然にたいして尊敬をすること、とくに言葉をもたない動物にたいする配慮が厳しく教えられている。プラムフィールドに放浪の末にたどり着いた Dan が家畜の牛に闘牛ごっこをしかけたために怪我を負わせたときに、ベア先生はつぎのように生徒たちを教える。

“As I never expected to have any at Plumfield, I never did make such a rule,” answered Mr. Bhaer, smiling in spite of himself at the boy’s excuse. Then he added gravely, “But one of the first and most important of our few laws is the law of kindness to every dumb creature on the place. I want everybody and every thing to be happy here, to love, and trust, and serve us, as we try to love and trust and serve them faithfully and willingly. (598)

プラムフィールドは、動物を慈しむという管理システムを導入することにより、動物と共存する生活を維持しようとする。

『若草物語』の舞台は、外部の厳しい現実世界から距離を置いて隔離され、それぞれのシステムにより登場人物の内面や行動を律する「システム」に管理された安全なユートピア的性質をもつ領域である。個人の内面世界にはキリスト教に基づく道德律、家庭には家政、学校には規則、そして社会においては刑務所が象徴する法律という各々のシステムが、基準に適合しない要素を排除し、統制をはかる。『若草物語』の作品世

界においては、管理の及ぶ自然環境とその構成物だけが共存が許され、ユートピア的な世界の一端を担っているように見える。

## 2. ユートピア世界にたいするオルコットの偽装のテクニック

オルコットは、“a girl's book”を書くようにという出版社の意向に従い、道徳的なユートピア世界を保持することに努めることが課された。しかし、第一部の後半において、オルコットはジョーをローリーと結婚させないこと選択をし、読者の期待に背く。また、ユートピア的表層を侵害せずに小説世界を保持しながらもいくつかのテクニックを用いることで、ユートピア世界から遮断されている現実の厳しさや謎に満ちた予測不能な様相を自由に書くことを可能としている。

『若草物語』は入れ子細工のような多層なナラティヴを導入している。第一部の Part One と第三部の最後の場面において、オルコットは小説世界を家庭劇“Little Women”であったと説明し、舞台上で演じられる劇であるという偽装を施す。また、三部作をとおして導入される様々なナラティヴは、マーチ家やブラムフィールドを中心とするユートピアの領域にとり不適切な内容を隔離する効果をもつ。生や死と対峙する現実や戦争の話、また、センセーショナルな題材を扱う小説群でオルコットが扱ったような冒険譚は、ユートピア世界から距離をもたらし効果をもつナラティヴの中に導入される。第一に、劇中劇や作り話という体裁をとるものがある。たとえば、四姉妹が演じる家庭劇“A Gloomy Wood”は魔女、魔法、闘争の場面を扱う。また、家庭新聞内 *The Pickwick Portfolio* の小説“The Masked Marriage”、ピクニックの場で姉妹たちの継ぎ足していくお話遊び(“Rigmarole”)などもあり、ブラムフィールドの子供たちの「お話遊び」では使用人が南北戦争の体験談を語ることもある。エイミーのヨーロッパやジョーのニューヨークの近況は、書簡体形式をとって語られる。登場人物たちの日常の生活圏の平穏さを乱す要素は、演技やお話という虚構という形態をとったり、遠方で生じたこととして紹介されている。

道徳的な「少女向き」の作品という体裁をとることを受容したオルコットは、複数のナラティブを導入することで、ユートピア的性質を脅かす現実の様相を執筆することを可能とした。さらに、彼女は自然界をありのままに描写することをとおして、保護された平和な人生が隠蔽している「現実」を描いた。ユートピア的世界に共存することを許された「管理された自然」と、人知を越え、予測や制御不能な「管理されない自然」の力の2種の自然の姿を描写することで、非現実的な平和な小説世界に「真実」を潜ませることにオルコットは成功している。

### 3. 「管理された自然」と擬似自然界

#### (1) 第一部

作家としての名声が確立されていない時に執筆された第一部から、成功を収めた第三部に至る作品には自然描写に違いがみられる。第一部では、ありのままの自然の力がユートピア的世界を侵害しないように周到的な工夫がなされる。自然環境は登場人物たちが管理できる要素である。ローレンス屋敷の温室の中で育成される花や、死んだ生物を囲うプラムフィールドの the Laurence Museum が登場人物たちが接する擬似的な自然環境を象徴する。作家としての評価が高まった第二部と第三部は、人知を越えた管理ができず、脅威をもたらし得るという自然のありのままの様相の描写が多くなる。第一部で強調される「管理された自然」は、第三部では人間の力を越えた自然の側面が強調されるようになる。しかし、第一部や第二部においても、「管理された自然」はユートピア世界を支えてはいるものの、その世界に負の側面を潜ませる媒体として機能している。「管理された自然」の中で日常生活を送る登場人物たちを描きながらも、オルコットは彼らが接する都合のよい自然が非現実的なものであり、擬似自然にすぎないという事実をユートピア的表層の背後に潜ませている。

第一部では、マーチ家を中心とした領域に描写される自然は、子供たちの楽園を構成する要素であるだけではない。たとえば、夏にはボート



遊び、冬にはスケート遊びを提供する川は、氷が割れてスケートをするエイミーを冷たい水中に落とす。慣れ親しんだ自然は、生死を左右する危険な場となる。マーチ家が飼っていた小鳥は適切な世話がされないために冷たくなって死んでしまう。しかし、その生命の重さが語られることはない。ローレンス邸の温室も、人間の手で世話をされて生命を保つことができる一種の擬似的な自然環境である。動植物は登場人物たちと共存はしているが、都合よく利用されているにすぎない。温室を案内されたジョーが“fairy-like”と感じるように (63)、それは作られた擬似的な自然である。第一部の自然界は雪で電車が遅延したり、にわか雨に降られたりと常に管理や制御が可能な存在とは限らない。しかし、水に落ちたエイミーが死の恐怖にさらされるものの、生命に直結し、人間に抗う猛威を振るうといった自然の力の描写は抑制された筆致で語られる。

## (2) 第二部

プラムフィールドの少年たちは水槽で魚や亀を飼ったり、畑や庭で作物や植物を栽培する。野草畑を管理する生徒もいる。広大な学校の敷地には果樹園、馬、牛、豚がいる牧場、また、家畜として七面鳥の野禽類も飼っている。自然界と共存するための管理する術が学べるような仕組みが提供されている。さらに、博物館も建設され、博物学への興味も抱かせる。彼らは、敷地内の小川、池、森などで自由に遊び、そこに生息する植物を採取したり、こおろぎや小鳥などの小動物とも関わりをもって広大な自然環境の中で生活している。しかし、彼らの自然への関与とは、ときには動植物の生命さえも自分たちの目的のために利用できるといふ、一方的な自然界との接触にすぎない。

博物館へ納める動物を求めるために、ライフル銃で鳥やりすを殺して剥製にすることを自慢する生徒がいたり (738)、病気の猫を安楽死させる方法が紹介されるように、少年たちの自然界の管理は生命を剥奪することにも及ぶ。管理された都合のよい自然環境においては死が象徴する

負の要素が剥奪されているために、彼らは生物の生死の重さやその意味を理解することはない。科学や博物学という教育目的で敷地内に建設される博物館は、死という切り取ったサイクルにおける生命の様相を提示はするが、生態系という循環の流れの中で生命の意味を教えることはない。展示物は観察される対象ではあるが、観察者に反応することはない、それが備えた力や生来の姿を見せることはない。彼らは納屋に好きな動物を飼って「動物園」と呼び、鞭を持った少年の周囲をロバに乗った者が回るといふ「サーカス」遊びをする。時には足の悪いからすを自分たちの楽しみのために追いかけて遊ぶこともある（689）。

安全を保証する境界線でもある柵を越え、ベリー摘みに行くことにより迷子になる危険はあるにしろ、プラムフィールドの安全な領域内であるかぎり、自然界の人間の力を越えた力は、彼らに脅威を与えることはない。くまんばちに刺されたり、木や池に落ちたり、りすに収穫したどんぐりをとられたりする事件が、思い通りに運ばない出来事として描写される程度である。小さな女の子たちがおままごとセットで家事のシステムを学ぶのと同様、都合のよい教育目的の自然環境で学習している。プラムフィールドの教育システムをとおして少年たちは自然界に関与しはするが、それは野生のままの自然ではなく、彼らが管理しやすいように大人たちが「管理」している一種の擬似自然界への接触にすぎない。

少年たちは、動植物の世話をし、手入れをすることで作物を収穫することを学ぶ。それは、自然界にたいする管理の方法を学ぶことである。オルコットが作品世界に持ち込む死や、制御を越えた自然界の様相にたいして、少年たちは対処する術をもたない。現実の自然界へ接触していないそうした少年たちの姿勢は、動物の死への過度の興味や関心を示すことにも映されている。死を理解できない赤ちゃんの Teddy が水槽に入れた大きなかきが小さなものを食べる様を楽しんで見るように（647）、少年たちの死への関心はそれへの無知をさらす。たとえば、彼らは猫の安楽死の方法に過剰な関心を持ったりする（717）。また、標本になるために蝶々が命を奪われていく詳細な場面（647）にも、人間に

利用される目的で奪われる生命にたいする尊敬の念や感傷の筆致はみられない。野生の子馬を飼いならすことに成功したダンにたいして、ジョーが“useful”になったとその馬を評価するように (733)、プラムフィールドというユートピアにおける住人たちは、人間中心主義に立脚して自然界を管理する行為を、自然界と共存する姿勢と認識さえているようにみえる。

#### 4. 第三部における「管理されない自然」と オルコットの環境への意識

第三部は、第二部から10年後のプラムフィールドが語られる。資本主義の影響を受け、周囲からは遮断されていたユートピアを模した立地に建っていたマーチ家やローレンス邸は、プラムフィールドの敷地内に移動している。登場人物たちは常に外界から隔絶され、保護された空間を確保しようとする。敷地内も第二部の博物館が女子生徒たちが裁縫を学ぶ施設に代わったり、古い柳の木のそばの牧場は運動所になり、テニスコートができたりと整備がなされているが、豊かな自然環境を有することに変わりはない。登場人物たちは、隔離された領域で自然と共存して生活する。第三部では寄宿舎を出た第二部の少年たちの生活を描写することが多くなるために、作品世界のユートピア的な核となる領域は保持されながらも、そこから離れた領域で起こる出来事の内容が作品展開の中心を占める。

プラムフィールドの登場人物にとり、「管理されない自然」と自分たちの間には距離があるものの、そこを離れた者たちの報告によりその存在を認識するようになっていく。たとえば、オーストラリアで牧羊をしていたこともあるという記述があるダンや、帰郷の際にカリフォルニアや西部での体験を話す。豊かな野生の自然環境やムース、バッファロー、熊、狼などの動物が生息する西部が、聞き手には一種の架空の話のように受け入れられる (854)。そうした野生の自然界は、ローリーが関心をもつように、西部の土地投機熱が高まったことを受けて経済システムに

「管理」され始めている。さらに、Montana Indians が土地を追われたり、Dakota Indians らのネイティヴ・アメリカ人が置かれた窮状が知らされる。白人の管理システムは、自然環境や野生動物だけでなく人間すらもその対象とし、彼らの土地の統制を強化しようとしている。

管理しようと奮闘する同時代のアメリカの一面を描写しながらも、オルコットは「管理されない自然」を描写することをおして警鐘を鳴らす。それは「管理できない自然」はプラムフィールドの外部に存在するだけではなく、内部においてもその制御できない力を示す。ダンが連れてきた犬をからかっていた友人をかばい、Rob はそれに噛み付かれてしまう。第二部と同様に、動物にたいして傲慢な態度をとるのであるが、犬は利用されるだけではなく、人間に反逆する。動物が意志を持つことが示され、常に管理できる対象ではないことを、狂犬病の恐怖や痛みをおして少年たちは理解することになる。

プラムフィールドの一種の擬似自然ではなく、真の自然の力を体験した Emil とダンの帰郷した姿も、内部に現実を知らしめる一因となる。卒業後のエミルは、船乗りになる夢を叶える。プラムフィールドの生徒であった頃に憧憬していた海は、想像した以上の力をもっていたことを理解する。彼は難破して海を漂い、そこが単なる夢や希望を実現する場ではないことを、現実の自然の力を体験することで認識する。彼は海洋で死の恐怖にさらされながらも、その恩恵である雨にのどの渇きをいやされて生還を遂げる。人間の力が及ばない自然界の脅威にさらされ、運命にたいして“powerlessness” (950) であることを痛感するが、同時に、雨という自然の力に助けられ、その営みに生かされていることを実感することとなる。野生の自然界に身をおいたダンは、弱い人間をかばった正当防衛のため殺人を犯すこととなる。彼は、自分の中に存在する性質を制御できず<sup>5</sup> 刑務所に投獄される。出所後に鉱山で働いていた最中に、岩盤の崩落事故にあう。鉱山の資源を搾取するために利用される土地が、

---

5 オルコットが生涯を通して探究した、人知を越え、制御のきかない自然界という対象は、同様の性質をもつ人間の心理、さらには、その本質への彼女の希求の姿勢を映すものでもあろう。

利用する者の意志に沿わずに崩落事故を起こすこととなる。管理や搾取の姿勢を強めて発展を遂げていくアメリカ社会の時流に抗い、管理されない自然の力を認める姿勢に、オルコットの環境問題にたいする先見性が見えてくる。

### おわりに

『若草物語』の第一部では管理された自然とありのままの自然を暗示的に書いていたオルコットではあったが、第一部の成功をもって、第二部では人間の自然にたいする利己的な管理や考えを、そして、第三部では管理されない自然の力を提示することとなった。管理できないものへの憧憬が、海洋、天空、大地などの自然界の営みを描写することにより率直に示されるようになる。

第一部ですでにジョーは、“I like adventures…” (54)、“… the home—nest was growing too narrow for her restless nature and adventurous spirit.” (351) と語り、家を出てニューヨークに向かう。しかし、登場人物たちが生命力溢れる自然界の営みにたいして、また、鉱山の崩落事故のように人間による管理を越え、それを転覆させるほどの力をもつ自然界の壮大な力にたいする賛美を率直に表明することはあまりない。一方、第三部では、自然界を放浪するダンにたいして、ジョーは自然の力への憧憬を語る。彼女は “So far I’m sure the free life was best. Now that you are a man you can control that lawless nature better.” (893) と述べ、自由が最良のものであり、ありのままの自然 “lawless nature” と接する生き方を賞賛する。

オルコット自身も未知の世界に憧れ、南北戦争には従軍看護婦を志願している。彼女は、『若草物語』の平和な家庭とプラムフィールドの管理された領域を、家政や学校の管理システムが統括する世界として描く。作品の保護された、平和なユートピア的な特質が強調され、彼女を長い間、「家庭」小説、「児童小説家」と評する一因となった。しかし、自然という主題をもとに考察すると、そのユートピア的な世界の背後に巧妙

に隠された、人間の管理が及ばない、ありのままの姿の「自然」へのオルコットの強い憧憬と賛美の念が巧妙に配置されていることは明らかである。

オルコットは『若草物語』において、彼女を心理的に分裂させてきた様々な葛藤や分裂を統合し、昇華させることが可能となったのではないであろうか。登場人物たちのように自然を自分自身のために利用するだけでなく、作品において環境利用への警鐘を鳴らすように、オルコットはそれ自身への配慮も忘れてはいない。第一作の『若草物語』出版以降、センセーショナルな題材を扱った作品の執筆をやめたことは、単に金銭的な必要性を満たすものを書く必要がなくなっただけでなく、それらを統合する場を『若草物語』に見出したからではないであろうか。

オルコットが偽装や葛藤を経てありのままの自己を受け入れていく昇華の過程は、自然という主題の描写をとおしてこそ、可能となったといえよう。そして、自然描写をとおした一種の偽装のテクニックの成功こそが、「自然」という主題をオルコット研究から隠蔽し、回避させ得てきた理由ではないかと考えられる。

## 引用文献

- Alberghene, Janice M. and Beverly Lyon Clark, eds. *Little Women and the Feminist Imagination: Criticism, Controversy, Personal Essays*. NY: Garland Pub. Inc., 1999.
- Alcott, Louisa May. *Little Women, Little Men, Jo's Boys*. NY: The Library of America, 2005.
- . *Transcendental Wild Oats*. Boston: The Harvard Common Press, 1975.
- Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge: Harvard UP, 1995.
- Clark, Beverly Lyon. *Louisa May Alcott: The Contemporary Reviews*.

- Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Douglas, Ann. "Introduction to *Little Women*." *Little Women and the Feminist Imagination*. 43-62.
- Eiselein, Gregory and Anne K. Phillips, eds. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Westport: Greenwood Press, 2001.
- Elbert, Sarah. *A Hunger for Home: Louisa May Alcott and Little Women*. Philadelphia: Temple UP, 1984.
- , ed. *Louisa May Alcott: On Race, Sex, and Slavery*. Boston: Northeastern UP, 1997.
- Leopold, Aldo. *A Sand County Almanac*. 1949. NY: Ballantine Books, 1966.
- Myerson, Joel and Daniel Shealy, eds. *The Journals of Louisa May Alcott*. Athens: U of Georgia Press, 1997.
- Stern, Madeleine B, ed. *Alcott in Her Own Time*. Iowa City: U of Iowa Press, 2005.
- . *Louisa May Alcott: From Blood & Thunder to Hearth & Home*. Boston: Northeastern UP, 1998.
- , ed. *L. M. Alcott: Signature of Reform*. Boston: Northeastern UP, 2002.